

I 特集 子供たちの自己肯定感を  
どうはぐくむのか

## 特集

## 子供たちの自己肯定感をどうはぐくむのか

### <座談会日時・出席者等>

日時	平成28年12月20日(火)	16:00~17:30
座長	明石 要一	国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター長
出席者	有松 育子	文部科学省生涯学習政策局長
	伊藤 美奈子	奈良女子大学大学院教授
	伊野 亘	国立青少年教育振興機構理事・国立妙高青少年自然の家所長
発言者	田中 壮一郎	国立青少年教育振興機構理事長

### 自己肯定感とは何か

**明石** 近年、日本の子供たちの自己肯定感が低いと言われていますが、果たしてどのような視点から自己肯定感を見ればよいのか、青少年の自己肯定感の捉え方に注目が集まっています。松野文部科学大臣は省内にタスクフォースを設置し、どうしたら日本の子供たちの自己肯定感が高められるのかについて検討しており、教育再生実行会議でも専門調査会が設置され、日本の子供たちの自己肯定感が低い現状について議論されているところです。

国立青少年教育振興機構でも、これまで青少年の自己肯定感について定点観測的に調査を実施し、その現状や経年変化を明らかにしてきたところですが、とりわけ日本、アメリカ、中国、韓国の4か国の高校生を対象に行った国際比較調査では、3か国の高校生に比べ、日本の高校生の自己肯定感が最も低いという現状が見えてきました。

そこで、本日の座談会では「子供たちの自己肯定感をどうはぐくむのか」をテーマに、それぞれご専門の立場からご意見いただきながら、子供たちの自己肯定感の現状や課題、自己肯定感をはぐくむ要素等について議論を行い、学校・家庭・地域において子供たちの自己肯定感をはぐくむ方策について示唆を得られればと考えています。

まず、議論を始めるにあたり、臨床心理学をご専門とする伊藤先生から、自己肯定感や自尊感情などの言葉を整理していただきながら、日本の青少年の自己肯定感の現状についてご説明いただけますでしょうか。

**伊藤** 私は、長年、臨床心理学をやってきましたが、専門家というほど自己肯定感に精通してはおりませんでした。しかし、東京都でスクールカウンセラーをさせていただいたことをきっかけに、東京都教育委員会と一緒に自己肯定感を高める研究に携わらせていただき、そのご縁で7年ぐらい前から自己肯定感にかかわってきたというのが現状です。

言葉の定義の問題ですが、自己肯定感や自尊感情、自己評価などよく似た概念がたくさんあり、東京都でも「自尊感情・自己肯定感を高める研究」として、二つの言葉を並べて使っていました。学問的にはその二つは必ずしも同じではないのですが、教育現場



明石 要一

で説明する時には「自分が好きである」とか「自分に満足している」、あるいは「自分しかかけがえがない存在だ」とか、自分自身をオーケーと思える気持ちということで「自尊感情・自己肯定感」と並べて使っていました。

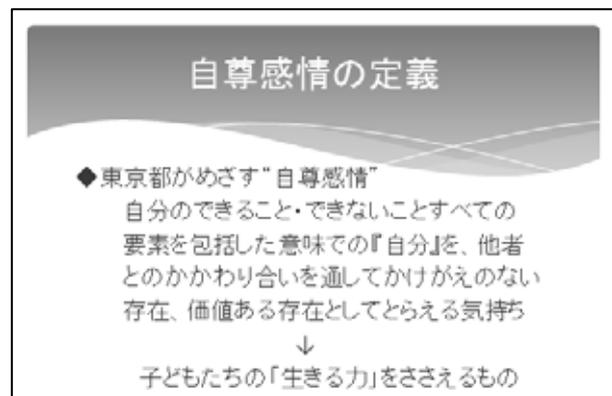
この他にも、「自分には何かできる力がある」という自己効力感や、「ありのままの自分を受け入れる」という自己受容、「自分は人の役に立っている」という自己有用感など、心理学の世界では自尊感情や自己肯定感とよく似た概念がたくさんあって、それぞれが細分化されて研究されています。東京都では、教育現場の中では自尊感情や自己肯定感を大きく括って、「自分のことをオーケーと感じる感覚」、あるいは「自分に対して満足している」、「自分が好きだ」という感覚で捉えるのがよいのではないかということになりました。

しかし、東京都で最初に問題になったのは、子供たちの自尊感情をこれ以上上げていいのかという意見が出ました。「自尊感情」という言葉は心理学ではプラスの概念なので、これ以上上げてはいけないということはありません。それでは、なぜそのような意見が出たのかと考えてみたところ、「自尊心」と混同されているのではないかと思いつきました。広辞苑では「自尊感情」という言葉ではなく「自尊心」という言葉が載っています。その言葉には、自分に満足するとか自分を誇りに思う気持ち以外に、「プライド」という意味が書かれていたと思います。そのあたりがこんがらがってしまうと、自尊感情が高すぎるとプライドが高すぎるとか、あるいはわがままになる、うぬぼれになる、自己中心などマイナスに出てしまうことではないかという意見になるとわかりました。そこで、東京都では、従来の「自尊感情」の意味を少し膨らませて考えることにしたのです。

皆様のお手元にある資料は、平成 23 年に私が東京都の研究報告(平成 23 年度東京都教職員研修センター主催夏期集中講座)をしたときに使った資料です。東京都では自尊感情の概念を、「自分のできること・できないことすべての要素を包括した意味での『自分』を、他者とのかわり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在としてとらえる気持ち」と定義し直しました。自分が好きだとか、自分が大事というだけでは、ややもすれば、自分は好きだけでも人はどうでもよいか、自分の個性は尊重したいけど人の個性は認めないとか、逆に人のことを大事にする余り自分を殺してしまうということも考えられ、学校教育あるいは社会の中では決して健全なものとはいえません。自分を尊重する気持ちだけではなく、人のことを尊重できるという人間関係における自信とか、あるいはキャリア教育などで重視されている「人に自分の気持ちを伝えること」とか「自分のことは自分で決めること」など、東京都ではそのような広義のものを含めて自尊感情を定義してきました。

自尊感情というのは、ちょっとゆがんでしまうと、うぬぼれや自己中心に混同され誤解を受ける可能性があります。しかし、そうではなくて、社会の中で生きていくために、自分も大事、人も大事、人に合わせることも社会でうまくやっていくことも大事だけれど自分のことを潰さない生き方をするという方向で、東京都では自尊感情を考えてきました。

明石 東京都の自己肯定感の定義は、新しい視点といえるのでしょうか。



**伊藤** 自尊感情の専門家の先生に言わせたら、それは自尊感情ではないと言われるかもしれませんが、自尊感情を一面だけで捉えると、わがままだったり、うぬぼれなどと区別がつきにくくなる危険性もありますので、そのあたりを多面的に捉えるようにしました。

**明石** ありがとうございました。伊藤先生に何か質問はございますか。

**伊野** 社会の中で生きていくうえでの自分の感情として、他者とのかかわりの中で自分に対してオーケーという思いを持てるかどうか、そのような意味合いになるのでしょうか。

**伊藤** 私はスクールカウンセラーをやっていますが、学校の子供たちとかかわっていると、人の存在というか、人の目や人からの評価から完全に独立するというのは難しいと思います。人間関係を作りながら社会全体の中で自分をどう位置づけるのか、そこでどのように貢献できるのかなど、そのようなことを含めて考えると人との関係性を抜きにして自己肯定感は語りにくいので、それらも含めて多面的に考えることが大切だと思います。

**明石** 伊野理事は、小学校での校長経験もあり、現在は青少年教育施設の所長もされていますが、今の小・中学生の自尊感情にまつわるエピソードは何かございますか。

**伊野** 青少年教育施設で行われる集団宿泊活動は、ミニ社会を体験する機会になっています。例えば、学級で行われている係活動のように、集団宿泊活動でも一人ひとりがいろいろな役割を果たしています。その役割を果たすことを通して、自分も学級の中で役に立っているという思いを一人ひとりが持ち、お互いに認め合えるような学級づくりを目指しています。このように認め合える学級という環境の中で一人ひとりが役割を果たし、自尊感情を高めています。

また、青少年教育施設で長期キャンプを行いますと、発達障害や不登校などいろいろな悩みを抱えた子供たちも参加します。その中で、キャンプが始まる前の姿と終わった後の姿を見比べると、仲間との関係性の中で自分に自信を持てるようになります。人のかかわりの中で子供たちが変わり、自己肯定感が向上していく姿が見えることがよくあります。

**明石** 伊野理事にお聞きしたいのですが、この子供の自尊感情が高い、低いというのは、子供の表情を見て分かるものなのでしょうか。それとも、表情では分からなくても、じっくり気持ちを聞けば分かるものなのでしょうか。キャンプに参加して自信を持ったということは、何を見れば分かるものなのでしょうか。

**伊野** 小学校は365日という長いスパンで子供の成長を見ていきますので、その成長は顕著に分かります。しかし、2週間とか20日間といった短いスパンの中で行うキャンプでも、子供たちが抱えている課題にあった体験活動を行うことで、24時間生活を共にしていると子供たちの言動や表情が徐々に変わっていく様子が分かります。当然、ぱっと見ただけではなかなか分からないのですが、子供たちとキャンプを楽しみ、長い時間、行動を共にしていると、子供たちの変容を見て取ることができます。

**明石** このような質問をしたのは、よく小学生が学校で算数の成績が悪かったり、友達にいじめられたりすると、「ただいま」を言わずに黙ってドアを開けてすーっと2階に上がっていくことがあります。そのような行動で落ち込みがわかることがあります。

「男はつらいよ」という有名な映画がありますが、その中で寅さんはなかなか「ただいま」と言えない。玄関先をうろうろして、右手に500円のお土産を持っている。「寅」と言って褒めてあげると入ってくる。伊野理事から見て、寅さんの自尊感情は高いのでしょうか、低いのでしょうか。

**伊野** 寅さんは自分というものを持っている非常に芯の強い人だと思います。いろいろ失敗しながらも、信念を曲げずに生きている。ある意味芯の強い、非常に自己肯定感の高い

人ではないかなと思います。

**明石** 田中理事長の好きな言葉で「へこたれない」という言葉がありますが、あれだけ失恋してもへこたれないで、まだ愛を語り、人を愛していくという前向きな姿勢を見ていると、個人的には寅さんの自尊感情は高いと思います。

それでは、「ドラえもん」ののび太君はどうでしょうか。

**伊野** のび太君は、人間味があり面白いです。テレビでは何分かの間にいろいろな体験をしますので、その中で一つひとつの体験の中から勉強しているように思います。最初は、自分というものをなかなか出せないでいて非常に自己肯定感が低いですが、ドラえもんという強い味方のもとでいろいろな体験をして、30分の番組の中でちゃんと変わっていくところがのび太君だと思います。

**明石** ありがとうございます。額面どおりに自己肯定感が高い低いといってもわかりにくいので、このような話をしながら自己肯定感について理解できればと思いました。

有松局長は、今の子供たちの自己肯定感についてどのようにお考えですか。

**有松** 国立青少年教育振興機構の調査や内閣府の調査などいろいろな調査で、日本の子供たちは自己肯定感が低いと言われていています。今、文部科学省では「我が国の子供の意識に関するタスクフォース」を立ち上げ、自己肯定感が低い要因はどこにあり、どのような方策があるのかについて検討しております。また、教育再生実行会議でも伊藤先生にお入りいただいた専門調査会が立ち上がり、そこでさまざまな専門の先生方にご参加いただき、それぞれの知見から自己肯定感について検討していただくとしております。その前段階として、松野大臣より省内のタスクフォースで自己肯定感の低い要因がどこにあるのかを解明するようご指示があり、国立青少年教育振興機構や内閣府の調査、全国学力・学習状況調査のデータを使ってさまざまな観点からクロス集計を行い、分析作業を進めているところです。

また、タスクフォースでは、ヒアリングとして、内閣府の調査に携わった北海道大学の加藤弘通先生、東京都教職員研修センター、法務省にもお越しいただき、子供たちの自己肯定感の現状などについてお聞きしました。省内ではこの話を始めたときから子供たちの自己肯定感についてさまざまな意見があり、なかなか収束しない状況でした。そこで、加藤先生には、そもそも自己肯定感とは何か、なぜ日本の子供たちは外国の子供たちに比べて自己肯定感が低いのかということからお話いただきました。そこでも、自己肯定感とは自分が好きだとか自分には人並みの能力があるとか、自分に満足しているというものでしたが、加藤先生のお話を聞いて私が面白いと思ったのは、外国の子供と比べてみると日本の子供の自己肯定感には自己有用感が強く効いているという関係があるということでした。

先ほど伊藤先生がおっしゃっていましたが、日本の子供たちは人とかかわりを非常に意識して、自分に価値があるとか自分に満足するということを考えているのが特徴的だということでした。その理由としては社会のありようというか、文化的な背景などいろいろ考えられると思いますが、そのことは他者との関係から日本の子供たちの自己肯定感につ



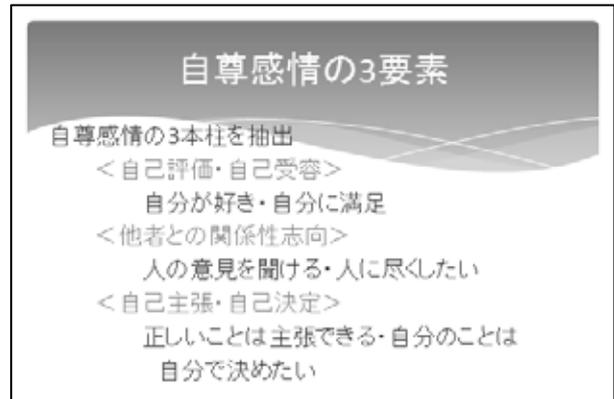
有松 育子

て考えなければならないということなのかと思い、非常に興味深い話と思って聞いておりました。

## 対人関係と自尊感情

**明石** 私も、日本人は社会の一員として対人関係の中で自分を評価するような習性があると思うのですが、伊藤先生はどのようにお考えでしょうか。

**伊藤** 東京都では自尊感情を三つの要素から捉えていました。一つ目は、狭い意味での自尊感情として、自分が好きだとか、自分に満足しているといった「自己評価・自己受容」です。二つ目は、先ほど有松局長もおっしゃっていましたが、人の意見を聞けるとか、人に尽くしたい、自分はみんなに理解してもらえているといった「関係の中での自己」で、人との関係性が基盤にあると思っています。三つ目は、自分の気持ちを誰かに伝える、表現するということで「自己主張・自己決定」ですが、これもすごく大事な要素となります。



先ほどのご質問ですが、欧米は個人主義で、日本人と比べると自分がすごく大事で自分を上手に主張する力が強いということがいろいろな調査結果からよく出てきます。一方、日本の子供たちは、人にどう評価されているのかとか、人からどう見られているのかとか、すごく周りを気にし過ぎるところがあり、そこでうまくいっていれば自分は大丈夫だと思えるのですが、そこがうまくいかない自分は生きている意味がないとか、学校はすごく地獄だと考えてしまうところがあり、そのような傾向は欧米と比べて強いのではないかと思います。そのような意味で、自己有用感、人の役に立っている、人間関係がうまくいっているという感覚なので、自尊感情に一番影響すると思っています。

本来は、人は人、自分は自分というふうに、人の目をよい意味でシャットアウトできたらよいのですが、人の目に引きずられてしまうというのがとりわけ思春期の子供によく見られる傾向だと思います。

**明石** 個人的には、この三つの中の「関係の中での自己」というのがはっとしました。そのような視点は今までありませんでした。大体、自分が好きで、自分に満足しているといった「自己評価・自己受容」と、自分が提案するとか意見を述べるといった「自己主張・自己決定」があると思っていたのですが、他者との関係性というような視点を入れてみると、欧米と中国と韓国はどうなるのか見てみたいと思いました。

**伊藤** 国際比較のデータをご紹介します。同じ資料の最後のページの「日中比較（自尊感情）」に、日本と中国の比較をした結果が載っています。日本の子供と中国の主に中学生ですが、先ほどの「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」を比較したところ、残念ながら三つとも中国のほうがぐっと高い結果となっていました。

**明石** 「関係の中での自己」も高いですね。中国の方は人の話をよく聞くということでしょうか。

**伊藤** 中国の中学生の方が「自分は人に理解されている」「自分のことを必要としてくれる人がある」という意識も強いということです。ただ、ここだけを見てみると、やはり日本の子供たちは自信がないのかなと思うのですが、その横の「日中比較（学校適応）」を見ていただきますと、「友人関係」や「教師関係」、「学校適応感」も中国のほうが高かったのですが、学校が楽しいとか、学校に行くのがすごく楽しみであるといった「学校享受感」はあまり差がありませんでした。

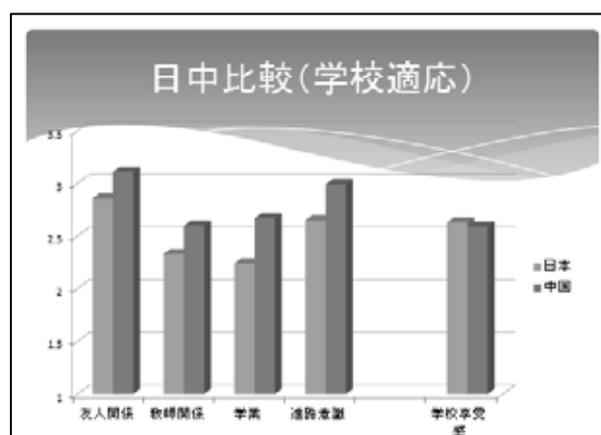
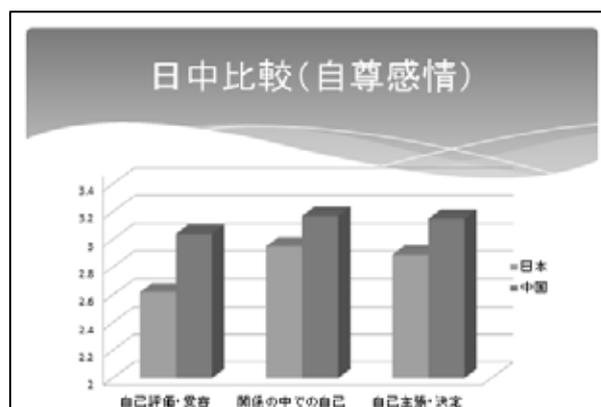
そうすると、日本人は、自分はできませんとか、自分が好きですといった評価については自己を低く見積もるところがありますが、学校が楽しいとか、自分にとって居場所だという感覚では中国と差がないといえます。ある意味、ここが日本人の特性といえるのかもしれませんが、自分を押し出すとか、できますといったところは苦手ですが、楽しいとか、やりがいがあるとか、そのような感覚的な部分は日本と中国で差がみられなかったのです、その視点から自己肯定感を見ていけば、別の切り口もきっとあるだろうと思います。

**明石** 日本の小学生のほぼ9割は学校が楽しいと言っています。勉強ではなくて学校が楽しいというところが非常に興味深いなど、お話をお聞きしながら思いました。

私のほうでも資料を1枚用意しています。『ガリ勉じゃなかった人はなぜ高学歴・高収入で異性にモテるのか』という私の著書からですが、「日本人の遺伝子に有効な指導法」というものがありまして、香川靖雄さんというお医者さんが、遺伝子に注目し、日米のセロトニン・トランスポーターの遺伝子多型の比較をした結果を載せています。

セロトニン・トランスポーターの遺伝子型には大きく分けてLL型とSL型、SS型の三つがあり、LL型というのは超積極的、SL型は積極的・自主的、SS型は消極的・従順となっています。日本人の場合はLL型が1.7%、SL型が3割、SS型が7割弱となっており、一方アメリカ人はLL型が32%、SL型が5割弱、SS型が最も少なく2割弱でした。

アメリカはよく「Any questions?」と言いますよね。とにかくしゃべらなければ損だと、アメリカはすぐ手を挙げる人が3割います。しかし、日本は2%しかいません。積極的なことを支持するような環境はあるのでしょうか、そのような遺伝子もあります。SL型というのは自分で発言するなどですが、一番興味深いのはSS型です。日本人には、周りを気にして人間関係から様子や空気を読むような人が7割弱います。これは日本の農耕民族の典型という面もあります。ある意味几帳面で、人より前に行かない、遅れもしないというメンタリティーがあることはこの分析からもうかがえます。このようなことも少し考慮しながら、日本の青少年を理解していかなければいけないと、今、伊藤先生のお話をお聞きしながら思いました。



**伊藤** 「消極」という言葉は、「積極」より何か劣っているかのように捉えられがちな言葉ですが、場によってはそれが必要とされることもあると思いますし、それがもっといい形で機能することもあると思います。日本人の遺伝的なものがこういった文化や社会に根づいているのか、どこに根っこがあるのかを考えることはすごく興味深いとお聞きしました。

**明石** 私はLL型を聞いたときにすぐ思い浮かんだことがあります。小学校5年生や6年生が修学旅行に行きますよね。記念写真で必ずピースをする子供がいます。このような人はLL型だと思っています。とにかく注目を浴びたいし、浴びてなんぼ、言った者勝ちというタイプです。ですから、東京の方よりも大阪の方のほうがLL型が多いと感じています。一方、SS型というのは、特に思春期の女子中学生を見ると、何となくそのようなところがあるという気がします。

**伊野** 横並び主義といいますが、例えば、同じ物を持っていなければとか、同じ格好をしていなければとか、そのようなところで心の安定を図ろうという気持ちが働いているように思います。周りを気にし過ぎず自分らしさを出す、そのようなところを何とか改善していかなければならないと感じています。

**明石** 伊藤先生にお聞きしたいのですが、男女とも大学3年生が同じリクルートスーツを着て就職活動をしますよね。私は短期大学の教員もやっていますが、実習に行くときも、みんな同じように決まった洋服を着ていきます。誰も指示していないらしいのですが、どこからそのような情報が伝わってくるのでしょうか。

**伊藤** 「就活ルック」みたいなものが売り出されていたりするので、そのようなものを見て、そんなに突飛な格好はしない方がよいとか、目立ち過ぎない方がよいとか、横並びの常識的な格好が就職活動でも評価されると考える人が多いのかもしれない。

**有松** 就職活動は一生をかけて行いますから、いろいろなところからそのノウハウを得ると思うのですが、それが行き渡り過ぎて感じることもあります。先ほど伊野理事がおっしゃったように、あまり横並び過ぎると、息苦しくて子供たちへの圧力になるのであれば、それは何とかしてあげたいと思います。しかし一方で、個人主義が行き過ぎていたり、自己主張することだけがすごくよいわけではないことも、何となくみんな分かっていると思います。

先ほど、他者との関係の中で自分のことを客観的に見た上で自分の評価をしている遺伝子の話は驚きました。空気を読めるだけだと悪いことのように聞こえることもありますが、他人との関係をはかりながら自分を表現していくということ自体は、日本の文化の特性というか、日本文化や社会の中で健全に発達していくということで必ずしも悪いことではないと思います。むやみに自信ばかり持って、根拠のない自信がある若者も多いという話もありますが、そのようなことは別にして、こうした国際比較の結果が必ずしも悪い結果ではないということを前提にした場合、言いたいことが言えないとか、他者評価があまりに効きすぎて自己評価が低くなってしまいせっかく持っている能力を発揮できないなど、どうしてそのようなことになっているのかということや、自分を好きだと思える、受け入れられるといった狭義の自己肯定感はどうすれば身につけられるのかということを探っていく必要があると思います。

教育再生実行会議の専門調査会で出てきていることですが、大いに他者から認められることや、斜めの関係の中で年上の子が年下の子の世話をして役に立ったという体験を積み重ねることが自己肯定感に非常に効くという話を聞いていると、体験活動の中でも特に他

人の役に立ったささやかな経験の積み重ねが他者の目から見た自分の評価につながり、自己肯定感の向上に効いてくるという気がします。

### 年齢・性別と自己肯定感の関係

**明石** 人間像の背景には文化がありますので、そのような意味では国際比較の結果から日本の子供の自己肯定感が低いと一概にいうのは難しいところがあります。しかし、同じ質問項目で「自分が好きです」とか「自分に満足している」という結果を見比べると、特に日本の中高校生が極端に下がっているのが気になります。

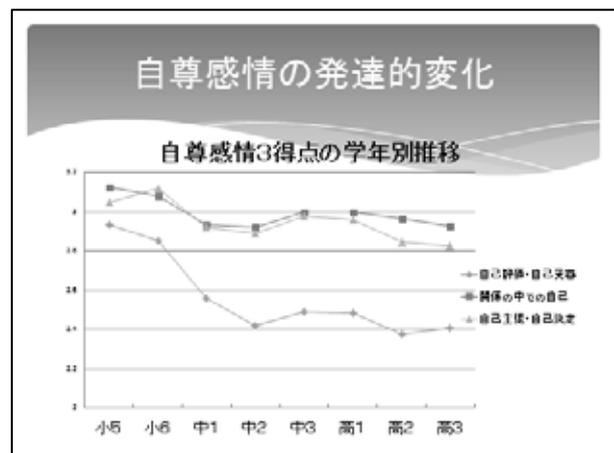
幼児期から小学校2年生ぐらいまでは、みんな自分が天下をとったみたいな気持ちになっており、私のような古い世代はまず月光仮面になったつもりで突っ走っていたりしましたが、そのような自己像が文化を受け入れてくると、自己肯定感が極端に下がってくるようになるのではないかと思います。

伊藤先生は、カウンセラーとして思春期の子供をいろいろご覧になられていると思いますが、このあたりのことはどのように考えればよいのでしょうか。

**伊藤** お手元の資料の2ページ目の左上が、思春期といわれる小学5年生から高校3年生に、先ほどの「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」について調査した結果です。小学5年生から中学2年生までは、「自分が好きだ」とか「自分に満足している」という狭義の自己肯定感はやがて右肩下がりになっており、あとは横ばいと低迷している状態になっています。

これは東京都で1万人、2万人という規模で行った調査ですが、実は奈良県で行った調査でも同じような結果でした。日本よりは全体に高くなりますが、多分欧米でやっても青年期の入り口は自己肯定感が下がる傾向がみられます。思春期に自己否定とか自己嫌悪とか、そのような傾向になりやすいというのは、日本人だけではなく、欧米社会でも同じような結果が出ています。

それはなぜかと聞かれるとその説明はなかなか難しいのですが、私がよく答えるのは、小さいときは自分を客観視するとか、自分を他者のごとく眺めるということはなかなかできないのですが、小学校高学年以降になると自分のことが見えてくるようになり、自己意識が強くなります。それだけではなく、人のことも見えるようになり、人の思惑とか人からの評価など想像できるようになるなかで、人から自分への評価も推察できるようになります。ただ、我々が自分を見つめ内省するときというのは楽しいとき



伊藤 美奈子

ではなくて、どちらかというとなんでいるときとか、孤独なときとか、失敗したときなどに多いので、人の目についても実際よりマイナスに想像しがちになります。そして、人と自分を比べるなかで、やはり「自分にはできないな」とか「自分には足りないなあ」という思いがどんどん自己肯定感を下げてしまうメカニズムがあるのかなと思っています。

そう考えたら、思春期はどんどん自己否定になって何か悪いことのように考えがちですが、発達という側面から見ると、＜自分が見えてきた＞＜人の思いも想像できるようになった＞＜人の思惑も推察できる＞という成長の裏返しだと言えるのです。さらに、こうありたいとか、こうあらねばという夢とか理想を抱いた結果、今の自分はまだだめだなという自分に対する厳しい目も生まれるのだと思います。ですので、この自己肯定感得点が下がっていくというのは必ずしもマイナスではなくて、頑張っている裏返しであったり、そのような自分が見えてきた結果であって、これがずっと続くということはないのです。

私のデータではないのですが、成人期も含め自己肯定感について調べた調査結果をみると、自己肯定感の変容は実は高校生ぐらいが底になっていて、その後、20代、30代、40代、50代と上がっていくというのが、比較的共通した傾向です。そのような意味では思春期というのは一時的に自分に対してすごく厳しくなったり、そこにとらわれてしまって、人の目からなかなか解放されない結果、マイナスの評価になってしまうというメカニズムがあると思っています。

**明石** 今の話をお聞きして、私も昔、中学校に入ってみるとすごいやつがいるな、野球のボールを投げて何でこんなに早いのだとか、走ってみてもうかなわないとか、勉強もありますけれども、高校に行くともっとすごいやつがいるか、そのようなことを感じた記憶があります。そのような意味では、伊藤先生がおっしゃるように、17、18歳ぐらいが自己肯定感の底になるのかもしれませんが。私は千葉大学で37年間勤めていましたが、大学には大学1年生デビューとか、就活で自信を深めてきて大学4年生でデビューするというのもあるのです。こう考えると、これから教育で必要なのは「〇〇デビュー」というか、落ち込むのだけれども、どこかでデビューさせるような仕組みづくりをしていくことが大事かなと思いました。当然、思春期というのは自己嫌悪に陥って、自己否定につながっていくこともある。私もそのようなことがありましたが、それを乗り越えてきた。ある意味でノーマルな発達プロセスだというような捉え方もしてみるといいかなと思います。

**伊藤** 臨床的にみると、不登校の子供たちはやはり自尊感情が低いですし、いじめを受けている子供たちもものすごく低く、虐待を受けている子供たちは自分は生まれなければよかったというような自己否定する傾向を持っています。ですので、自尊感情が下がることは決していいことではないということは共通認識なのですが、思春期には思春期の特徴があって、そのような自分と向き合い、自分のことを見つめ、人との関係でも悩み、そこでいろいろな経験を積みながら自分探しをして自分を見つけていく過程を通して、その後徐々に自尊感情が上がっていくということを考えると、思春期のあり方は他の年齢期とは少し違うと思います。

**明石** 伊野理事に伺いますが、青少年教育施設は小中学生、高校生が主な対象ですよ。施設でどのような事業をやれば、思春期の低い自己肯定感をデビューさせることができるのでしょうか。

**伊野** 先ほど明石座長のお話のなかで大学1年生デビューの話がありましたが、私どもの施設の近くには教員養成大学があり、教員を目指して入学した学生がボランティアを希望してきます。言うならば「ボランティアデビュー」でしょうか。当然、教育実習で学校に

行くのとは違い、施設のいろいろな事業を通して、子供たち同士の人間関係を学んだり、自分と子供たちとの関係性の中から、指導者としての在り方を学んだりしています。教員を目指している学生ですので、4年生になって就活となると教員採用試験を受けることとなります。採用試験の面接練習などで、学生と子供たちのことについて話をしていると、青少年教育施設でボランティアをしたことがある学生は、特に、児童理解や生徒理解という面で自信を持って子供たちへの接し方を話すことができるようになったと感じることがあります。

小中学生ですと、長期であったり短期であったり、体験の質にもよると思うのですが、子供たちの発達段階に応じて、子供たちが、仲間と共に困難を乗り越えたり、お互い切磋琢磨したりしていくような体験をプログラムとして用意し、子供たちに自然と学んでもらえるような環境を整えていくことを実践している状況です。

**明石** 兵庫県では、中学生の職場体験として「トライやる・ウィーク」をやっています。「トライ」には二つ意味があって、学校、家庭、地域社会のトライアングルで中学生の世話をしましょうということと、試みるという意味での try としていろいろな体験をさせましょうという意味があります。「やる」というのは頑張りましょうということ。「ウィーク」というのは1週間ということで、体験は中途半端はだめで1週間やらないとだめなのですよという意味です。主に6月または11月に兵庫県の中学生全員が職場体験をしています。

これで一番効果があったのは、不登校の生徒です。担任がその生徒の自宅に行って、何を体験したいのかと聞くわけです。基本的に全員が第1志望の体験に行くようにするのですが、もしそれが叶わない場合は第2、第3志望に行くこととなります。しかし、不登校の生徒は第1志望に行かせるようにして、1週間、職場体験させることで3割の生徒が学校に復帰するようになりました。このように、思春期の子供たちが職場体験も含めていろいろな体験をすると、自信を深めていくというデータがあります。

**伊野** そのとおりだと思います。私の前任の新潟県上越市教育委員会でも、市内全中学校の2年生が、5日間の職場体験をやっています。私の娘も体験したのですが、やはり変わってくるのが3日目ぐらいからでした。最初の2日間は、『疲れた』などと言って、消極的な態度で通っていたのですが、3日目ぐらいから少しずつ変わり、最終日には職場の方と信頼関係をつくり、働くことのすばらしさを感じることができたようです。その姿をみて、1週間という時間が持つ魅力、実体験の力を感じています。

妙高市は、市内の全小学校の6年生が国立妙高青少年自然の家で4泊5日の集団宿泊活動を行っています。4泊の中で、仲間とかかわりながら多くの体験をして、そのかかわりの中で自信をつけていこうということを目指しています。その成果といえるかどうかは分かりませんが、中学校の不登校生徒の割合が全国平均よりも年々下がってきている状況です。こういった認め合える望ましい集団をつくるためには、体験活動は重要だと考えています。

**明石** 島根大学では、10年ぐらい前から、教員養成の4年間で1,000時間の体験実習をするということを始めました。教育実習は当たり前です。その前に、1年生では学校訪問や施設訪問を自分で探し、2年



伊野 亘

生になると本実習の前に観察実習に行き、3年生で本実習をして、4年生で特別支援学校とかいろいろなところを自分で探していく。とにかく、4年間で1,000時間の体験実習をさせましょうということを提案しています。

私は教育学部にいましたが、学生たちの体験不足で、先生が不登校になりかねない状況にあるのです。そのような意味で、教員養成でも体験をさせましょうということが脚光を浴びて、文科省から高い評価を受けた経緯があるのです。

**伊野** 今、私どもの施設には、上越教育大学や信州大学、新潟青陵大学の学生さんがたくさんボランティアに来てくれて、自分たちでいろいろなことをやろうと自主的にさまざまな企画に取り組んでくれています。その時間の長さも自信になると思いますが、自分たちで計画し、自分たちで準備し、実施するというような自主企画事業をすることで、周りからも認められ、学生にとっては非常に大きな自信になるのではないかなと思っています。

**明石** 伊藤先生にお聞きしたいのですが、中・高校生のボランティア体験を見ていますと、性差がものすごくあるのではないかと感じます。女子中学生、女子高校生、女子大生というのは、大ざっぱに言うと7割ぐらいはボランティアに参加していますが、男子は人間関係をつくるのが下手くそなのか2、3割といった状況です。東京都の調査に、人の意見が聞ける、人に尽くすといった項目があったと思うのですが、今の男子が弱いのはどうしてでしょうか。

**伊藤** 先ほどの三つの要素で言いますと、やはり思春期でも性差は出ていまして、一つ目の「自己評価・自己受容」は、どちらかというとも男子のほうが得点は高いです。二つ目の「関係の中での自己」は、大きな差ではないですが、女の子のほうが高い傾向があります。

カウンセリングをしていても、女の子たちは人間関係にすごく影響を受けると感じる場合があります。友達関係がすごくいいと学校は天国だし、楽しいし、そこで幸せに過ごせるのですが、一旦そこで関係がこじれると、一瞬にして学校が地獄になって、死にたいと考えたり、自己肯定感が極端に下がってしまうということもあります。女の子の場合、生死に関わるほど人間関係の影響力が大きいと思います。

そのような意味で、外に出ていって人間関係をつくるというのも、もしかしたら女の子のほうが積極的なものかもしれないです。ただもちろん、性差だけでなく、個人差はもっと大きいと思います。

**明石** 有松局長、文科省を含めて、国や県の公務員のボランティアの参加度には性差が見られるのでしょうか。

**有松** 一般的に、女性のほうが参加率は高いのかもしれませんが。さきほど伊藤先生が、狭義の意味の自己肯定感、自己受容というのは性差があり女子のほうが低いとおっしゃっていましたが、先ほどご紹介した北海道大学の加藤先生の調査結果を見たところ、男女ともに同じようなカーブをしますが、男女で差があり、女子のほうが常にちょっとだけ低い感じになっていました。なぜそうなるのかはよくわからないのですが、さきほど伊藤先生がおっしゃったように、女子の場合は人間関係が影響しているのかもしれませんが、そこがまた難しいところなのかなという気もしています。

### 自己肯定感をはぐくむためには

**明石** それでは、最後になりますが、みなさんから、子供たちの自己肯定感をはぐくむためには、体験も含め、このようにすれば子供たちの人間度をもっと豊かになるのではない

かといった意見をいただければと思います。

では、まず伊野理事からお願いします。

**伊野** 私は、子供たちに「ふるさとの本物体験」を提供することで、「ふるさとで体験した思い出」が子供たちの自己肯定感を育ててくれるという考えを持っています。「ふるさとの本物体験」とは、地域の人や仲間との交流、いろいろな自然や文化、歴史などの本物を体験することができるような体験のことです。学校では、それぞれの地域との協働で行われている本物体験が、子供たちを育てています。

私どもは、体験活動を提供する青少年教育施設です。自然の家でも地域の皆様と協働で、多くの子供たちにふるさとの本物の体験活動を提供しています。本物の体験活動にするには、「年齢期や目的に応じた体験活動の質」「体験活動の豊富な種類」「多様な人との出会いとかかわり」「体験を行うゆとりのある時間」などが大切になってきます。これらを配慮しながら子供たちが自分で学び取っていきけるような体験活動を準備していくことで、子供たちの自己肯定感を育てていくのではないかと考えています。

私たちが「体験の風をおこそう」運動として行っているように、子供たちが自分でつかみ取っていくような本物体験の機会を提供していくことが大切であると考えています。学校でも、子供たちが主体的に行動できるように支援していますが、自然の家でも、自ら自信を獲得していくような体験活動を準備して支援しています。それが一番の自己肯定感を育む力になると考えています。決して押しつけるのではなく、植物を育てるのと同じように環境を整えれば、子供たちは、どんどん伸びていきます。このような、子供たちにとって切磋琢磨できたり、あるいは試行錯誤したりしながら取り組めるような体験活動を行える環境を、学校でも、施設でも、地域の皆様と連携・協働して準備したいと考えています。

**明石** ありがとうございます。伊藤先生は、いかがでしょうか。

**伊藤** 子供たちの自己肯定感をはぐくむことは、今、教育再生実行会議の専門調査会でも話し合っていて難しいテーマだなと日々悩んでいます。東京都と一緒に数年研究してきました。どのようなプログラムがいいのか考えてきました。学校でいいところ探しをしようとか、特別活動で考えてみようとか、さっきのキャンプとか体験活動とか、いろいろな教育プログラムが成り立ち得るなどと思っています。これは極論になるのですが、私は何をやっても、学校の中で何かこれをしよう、例えば人間関係を充実させようとか、共同学習、今のアクティブ・ラーニングのような取り組みを頑張ろうでもいいし、もっと違った褒め褒め運動みたいな取り組みでもいいですし、何でもいいので学校現場でいいと思われることにとことん頑張って取り組んだら、最終的には結果として自尊感情の向上につながるのではないかと考えています。それぐらい自己肯定感というのはいろいろなものとリンクすると思うのです。

実際に調査してみると、友達関係であるとか、教師関係であるとか、その子の学業成績への自信であるとか、家庭の養育環境など、すべて自尊感情と関連がみられます。だから何でもいいので、子供たちにいいと言われることを学校で、あるいは地域で取り上げてやってくださったら、結果的に子供たちの自己肯定感は上がるのではないかと、ぼんやりとですが考えています。

ただ、発達心理学という観点から、どのような時期にどんなことを子供たちにしてあげるといいかと考えたとき、発達段階によっても変わっていくと思います。生まれてすぐは無条件に愛される、自分は愛されているという経験がやはり大事で、自分への自信にもなりますし、愛してくれている人への信頼関係にもつながります。そして学校に上がると、

いいところを見つけて褒めてもらえるというのは、やはり子供たちの自尊感情を上げます。思春期以降になると、単純に褒めるというよりかは自分という存在を認めてもらえるとか、あるいはこの人の役に立っていると感じる事が子供たちの自尊感情を上げるのだろうと感じます。

ただ、愛されるというのは乳幼児期だけかというところではなくて、そこは一生続いて、それに「褒められる」が積み重なり、「認められる」が積み重なってというように変化していくのかなと思っています。

私たちの年代になっても、褒められるとうれしいですし、それは自己肯定感につながりますので、そういった教育の原点のようなところをもう一度見つめ直すのが大事なことかと思っています。

自尊感情というと、「できる」とか、「私はすごいです」という感覚にどうしてもとらわれがちですが、そうではなく、「自分も頑張ったらできるかな」とか、「できるかも」というやわらかでしなやかな自尊感情というのも大事なかなと思っています。できるとは思わなくても、何かを支えてもらった“できるかも”とか、頑張ってみてみただけで“できなくても大丈夫”とか、何かそういった感覚が今の子どもたちにもうちょっとあると、しなやかに生きられるかなと思ったりもします。

私はいろいろな自尊感情を研究している学校の研究発表などを聞きに行ったのですが、その中で今でもよく覚えているのが、高校でいろいろな取り組みをして、子供たちの自尊感情が上がったという発表でした。取り組みの中身もすごくよかったのですが、最後に教頭先生が「子供たちの自尊感情も上がりましたが、我々教員の自尊感情もそれと同時に上がりました」とおっしゃっていたのが印象的で、それはすごく大事なことだと思いました。子供たちの自尊感情を上げるだけではなく、その子供にかかわってくれている親御さんとか、先生とか、地域の人たちも含めて、子供を支えてくれている人たちの自尊感情も上がっていく。そこを支える力もすごく大事になってくると思います。学校や家庭、地域でできるかできないかではなく、その人たちに子供たちの居場所をつくってもらうためにも、親御さんと先生、地域の人たちも含め、みんなの自尊感情が上がるような取り組みが考えられるといいなと思っています。

**明石** ありがとうございます。伊藤先生のお話をお聞きして、ラグビーの泣き虫先生で有名な京都の伏見工業高校を思い出しました。伏見工業高校がラグビーで優勝したとき、ラグビーに参加しなかった高校生たちまでもが非常に自信を深めていって、非行も少なくなり、退学も減ってきたと聞きます。本人も大事だけれど、周りも元気をもらう。生徒が元気になると、先生も元気になるという話をお聞きして、そのような波及効果を狙いたいと思いました。

**伊藤** 逆に言ったら、周りが自信を持ったら、それが子供に返っていくということもあると思います。今の社会では、親御さん自身も自分に自信がなく、不安で迷っていたりして、それが子供にマイナスの影響を与えるということもあります。臨床をしていても、親のほうが安定するとか自信を持てたら、それが子供にいい声かけをするようになってきたりするなどの効果もあり、循環しているなとすごく感じます。

**明石** 『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』という新書があるのですが、その中で、オランダの日本人学校の子供たちの自尊感情は欧米に負けないというデータがあります。そこで私が考えたのは、駐在員の方は比較的残業が少なく、夕飯は大体家族一緒に、常にお父さん、お母さんとの会話があって、仕事の話も出るかもしれないし、おまへは学校で

どんな勉強をしたのかなど、一家団らんの会話があるということです。家族で会話することで、父親も頑張っている、母親も頑張っているかなとお互いの理解が深まり、家族のきずなが強くなる。そうなることで、家族が安定するのだらうと思います。多分、土、日曜日は車でヨーロッパを回ったりして、家族の体験活動も豊かになるのだらうと思います。

外国に行けば、アウトグループとイングループとあって、自分たちが味方で固まらないと敵が攻めてくるというような意識があって、それで家族が固まるということもあると思うのです。また、外国に行けば、必ず、おまえの宗教は何だとか、日本の自慢は何だとか、奈良県の自慢は何だとか、歌舞伎を知っているのかと言われる。一生懸命、日本の文化を勉強してみて、図書館で調べてみて、日本には、落語もあり、歌舞伎もあり、いろいろあるのだと日本のよさに気づく。海外に行って初めて日本のよさを見直すことで、自分も自信を持ってくるようになると、私は解釈しています。そう考えると、一度は違うところに行ってみて体験させるということも大事かなと、今の話を聞きまして思いました。

先ほど伊藤先生がおっしゃっていましたが、日本の場合、禁止語とか否定語などネガティブな言葉が多過ぎて、褒める言葉がない。例えば、主婦専業と仕事を持った母親では、子供が漫画を読むことについて対応が違うのですね。主婦専業は、放課後、子供が3時半に帰ってきて宿題をして、漫画を読んで、おやつを食べて、テレビを見るなど、放課後の使い方を全部わかっているのです。漫画の時間が30分と知っているのです。ですが、仕事を持ったお母さんは、帰ったときに子供が漫画を読んでいる姿をみるのが多くなるのでいつも漫画を読んでいると思い、漫画はだめと言ってしまうのです。

言いたいのは、「褒める」ということは、もう少し長く接触し、交流をしないとわからないということです。子供のトータルな生活を理解しない限り、欠点だけが見えてきて「また漫画読んで」と言ってしまう。褒める場合はもっとたくさん交流していかないと褒め言葉は発見できませんよということです。だから、会社でも課長さんも係員のアフターファイブをよく理解して、仕事の後はこのようなことをしているのだとトータルで見ると、否定語が減ってきて、ポジティブな褒め言葉が出るかなとも思います。褒めるということは難しいのですが、よく相手を知らない褒められないものです。

**伊藤** 子供たちは、本当に褒められているのか、口先だけで言われているのかを割と敏感に感じ取ります。私も親として時々失敗してしまうのが、褒めた後すぐに「でもね」という感じで文句を付け足したりしてしまうことがあり、反省することがあります。やはり、褒めるときは全身全霊でまずは褒めるということが大事かなと思います。

**田中** 一つ質問があります。今のお話をお聞きして、自己肯定感を高めるには褒めることが非常に大切だということについて理解を深めることができました。一方で、思春期に、いろいろなことに挑戦して失敗したりあるいはできなかったときに落ち込んでしまい、そこから立ち上がれないことが一つの契機になって自己肯定感が低下することもあるのではないのでしょうか。また、人間には、我的世界と我々の世界がありますが、我々の世界では、自分の欲求を全部実現しようとしても、そんなことは他人が認めてくれない。そうすると、自分で我慢する、あるいは自



田中 壮一郎

分の欲求を少し引っ込める、そういった自己を抑制する力を育てていかないと、最終的には自己肯定感につながっていかないのではないのでしょうか。

私は、このようなことは小さいときから取り組むことが大切だと考えており、現在、「体験の風を起こそう」運動の中で「読書（絵本）、手伝い、外遊び」を提唱しています。特に、小さい子にも、家族の役割分担として「〇〇ちゃん、これをやってね」と、本当は遊びたいところを少し我慢させ、ちょっとしたお手伝いをさせて褒めるようにする。人の役に立つことによって褒められ、認められるという経験を子供にさせる。中学生になって初めてこのようなことをさせるのではなく、幼児期から自分の欲求をうまくコントロールできる訓練をし始めることが大事ではないかなと私は思っています。自己を我慢する力、自己の欲求をコントロールする力というのは、自己肯定感と結びつくのではないかと思っていますのですが、いかがでしょうか。

**伊野** 小さいころから自己の欲求を我慢したり、家でたくさんの体験活動をさせたりすることは私も大賛成です。先ほど明石座長がおっしゃっていましたが、親との関係でいろいろなことが満足できていると、どこへ出ても我慢することもできるのではないかと私も思います。それに、幼児期や小学校でいろいろな失敗体験をさせることも大切で、失敗体験ができる環境にあるような学級や望ましい集団をつくり、子供たちは自分に我慢したり、失敗しても立ち直ったりして、「やるぞ」という意欲を出せるような環境をつくるのが大切であると思います。自己欲求をどう出しながら、いろいろな失敗を重ねながら、そして集団の中で失敗しても立ち直れる環境をつくっていくというのが大事だと思いました。

**明石** 私は二つ答えたいと思います。一つ目は、最近の企業の人事課長がなぜ体育会系の学生が欲しいのか。20年前も欲しかったけれど、20年前は集団の適応力があったり、上下関係を理解できるとか、そのような体育会系の文化を持った人材が欲しかったが、今は違う。今の青少年は大事にされ過ぎて、余りにも失敗体験やつまずいた体験が少ない。しかし、体育会系に入ると、必ず全勝というのはあり得ない。必ず負ける。負けてはい上がるとか、悔しいとか、そのような体験をした人が企業に入ってくると、メンタリティーがタフネスだということで体育会系が欲しいという視点に今はなっています。そのような意味で、幼児期からしっかり我慢させないと、思春期からでは間に合わない。

二つ目は、自分の欲求をどうセルフコントロールするか。これは非常に難しい。だから、今の若いお父さん、お母さんは悩んでいる。先ほど有松局長が年上の子供が年下の子供の面倒をみる話をされていましたが、私は縦と横の関係だけだと子供は我慢できないと思うのです。斜めの関係というか、親戚が集まってくるとか、近所のおじさん、おばさんいろいろな面倒を見てもらって我慢するのだよと言われれば、ちょっとは我慢できる。要するに、日本人は身内に甘い。世間というのは厳しい面と温かい面がある。世間を知るということは斜めの関係を体験するということです。今の青少年たちは、家庭と学校だけの縦と横だけは経験していて、世間の斜めの関係をしないから我慢できない。内弁慶では困るので、外でもまれてくるという経験があったほうがいい。例えが悪いかもしれませんが、サツマイモとかジャガイモをたるに入れて大きくかき混ぜると、イモ同士がぶつかって皮がむける。私や理事長の世代は、子供はたくさんいたから、もまれてもまれて切磋琢磨して、一皮むけてきたのです。今の青少年たちは、ジャガイモとかサツマイモが少ない。こねてもこねてもぶつかり合っていない。それがひ弱というか、やわになりかねない。そのような社会になりつつあるので、できたらもまれるチャンス、とりわけ斜めの関係をどうやって保障するのか、おじいちゃん世代やおばあちゃん世代、親世代と子供世代など多くの

世代が交流できる機会をどうやってつくるのかということが、これから大事になるのかなと思っています。

有松局長はいかがでしょう。

**有松** 冒頭申し上げましたように、現在、省内のタスクフォースで、これまでの調査データの再分析を行い、何と自己肯定感が関係ありそうなのか一生懸命探ろうとしています。今のところわかっているのは、意欲や達成感、規範意識、自己有用感などと、「今の自分が好きだ」といった狭義の自己肯定感との関係はありそうだということです。また、自己肯定感を高める取組を行っている小学校の視察も行ったのですが、その学校では、学級やグループで課題を設定し、自分で考え、自分で取り組むといった今でいう「主体的な学び」をさせるとか、友達と協力したり他者と協同させることで意欲や達成感といった意識が高まるというお話をお聞きしました。

また、自己有用感や斜めの関係とも関連するのですが、異年齢交流や児童会活動も自己肯定感を高めるのに有効だというお話でした。具体的には、通常の学級とは別に、小学校1年生から6年生の15人程度で構成される準拠集団を作り、児童はその準拠集団に入学から卒業まで所属し、準拠集団内で遊びの活動をしたり、運動会などの様々な特別活動を行っているとのことでした。異学年の児童と継続的に協同させることで意欲や達成感だけでなく、学年が上がるにつれ、その準拠集団を取りまとめる役割を担うようになると、責任感や他者への思いやりといった意識が高まるというお話をお聞きしました。このような準拠集団での活動は、基本的には高学年の児童や集団の自主性を尊重していますが、教員の方々は、集団での取組がうまくいった時に褒める、認めるとともに、うまくいかなかった場合は、次回うまくいくように集団内で振り返りができるよう誘導するというものでした。ですので、自分で考え、自ら役割を果たし、それを褒める、認めることにより、一つひとつの意欲や達成感がはぐくまれ、自己肯定感の向上につながるのではないかと思います。また、視察した小学校で見られた異年齢交流などの取組は、必ずしも学校だけではなく、例えば、子供が地域の清掃活動などに参加し、多様な地域住民と触れ合うことでも体験することができ、その中で、近所の大人の方々から褒められる、認められることによっても、子供やその様子を見ている保護者の自己肯定感が育まれると思いますので、地域における体験活動は重要だと思います。

また、褒めるということですが、これも再分析の結果を見ると、先生に褒められたとか、親に褒められたという経験が自己肯定感を高めるという関係にあるということがわかりました。一方で、褒め過ぎてはいけないとか、褒め方が難しいということもあるのですが、やはり褒められたという経験から誰かにしっかり認められたという思いが根本にあると、いろいろなことに挑戦ができるとか、へこたれないとか、そのような力になるのではないかと思います。

大人のかかわり方というところにヒントがあるかなと思うのですが、例えば、地域の取り組みで言えば、地域の行事には子供に役割を与えて参加させる。ただのお客さんではなく、ちゃんと役割を果たさせる。自然体験でも、主体的に何かかかわらせるといったような要素があると達成感や意欲が変わり、自己肯定感に効いてくるかもしれません。

**明石** ありがとうございます。田中理事長、最後に一言お願いします。

**田中** 本日は非常に貴重なお話を聞かせていただきましたが、やはり世の中には理不尽な面があるということをお子たちにしっかり認識させ、それにへこたれない、負けない力や、その中で自分のやりたいことを見つけ、それにチャレンジする意欲をはぐくむことが自己

肯定感を高めるうえで大切だと思います。

外国との比較調査において外国に比べ良い結果となればいいという話ではないですが、同時に、日本の青少年が引きこもったり、自分なんか存在している意味がないと思うような人間が増えてきたら、それは日本全体の活力がなくなることになるのではないのでしょうか。そのところを考えると、先ほど伊藤先生がおっしゃられた子供の広い意味での自己肯定感、自尊感情を高めていくことが大切だと思います。

**明石** ありがとうございます。皆様から貴重なご意見をいただきましたが、今、有松局長が言われたように、今後の課題といたしますか、残されたテーマもたくさんありますので、国立青少年教育振興機構をあげてこの課題に取り組んでいきたいと思えます。

